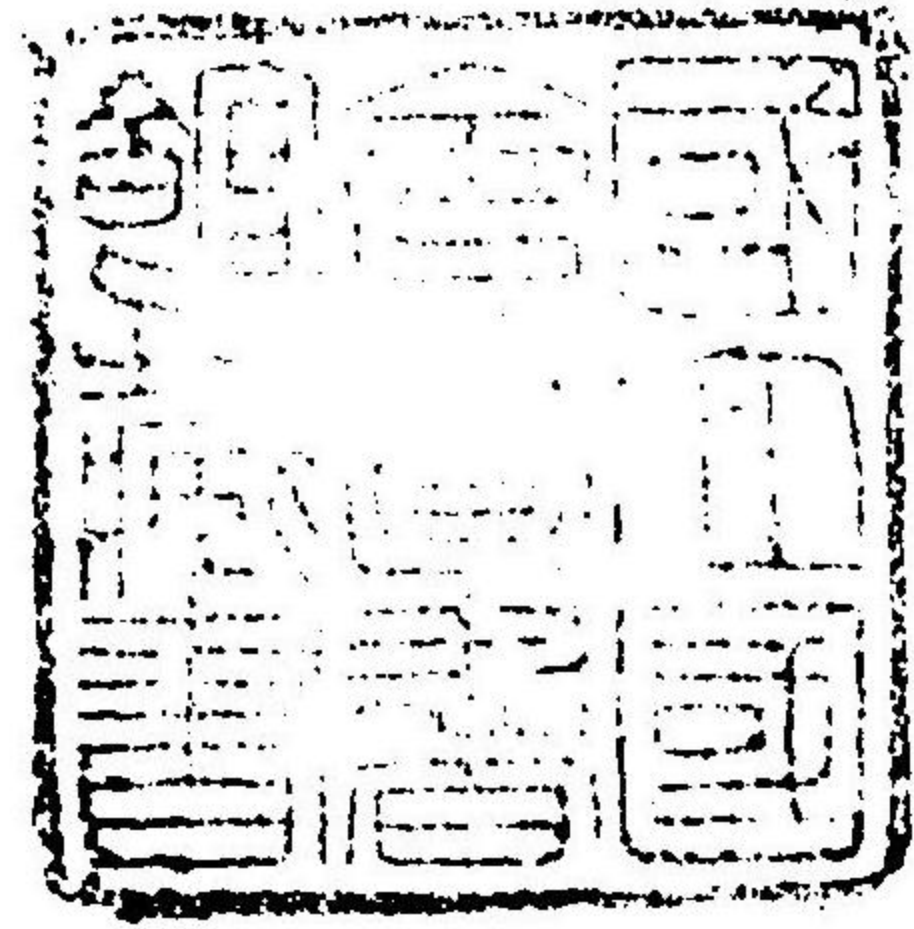


奥羽觀蹟聞老志

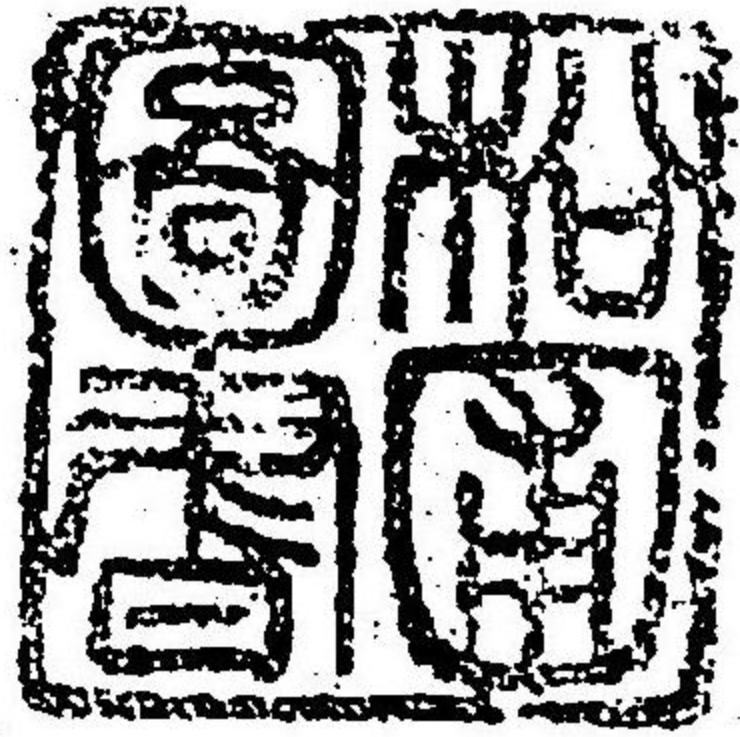
九

291.2

Sa5310



348443



奥羽観蹟聞老志卷之七下

仙臺 佐久間義和著

宮城郡

松島

南極千賀北石磯洲鏡光天影閱古今其左則有  
 五大堂寶珠磯通舸磯龍首巖白翁島其右則有  
 龜首巖觀月墩觀瀾亭破浪灣荒筈汀幽篁浦小  
 松崖青春磯畫屏島千松島等陽德瑞岩圓通天  
 麟寺院隱于蒙密山王稻荷八幡善遊堂社繞于  
 後山復羅解羅般若藏經翠柳仙冠九子綵繪島

分布于其前遠望之地宮戶寒澤鳳羽島納囊島  
桂華島細石濱浮于烟波其西南姦盜於火鑽燧  
吹火小島若點綴放馬島峙翠壁橋柱巖撐石梁  
其他以百數焉其近者則雙生並立布袋大黑相  
對峴子多門先後伊勢小町進退屬鐵兜等羅  
列皆入吟眸白鷗飛衛啄其洲綠鴨群鷺集其涯  
浩々烟波歸帆稍有無累々島嶼釣舟忽出沒萬  
松藏月斜碎葉間之金遠汀含風鮮崩江上之雪  
王粲遊海賦所謂若夫長洲別島旗布星峙桂蘭  
叢于其上珊瑚周于其址者亦彷彿于茲而定天

下之絕景古今之勝迹可謂扶桑之一滄洲也向  
陽林氏所謂松島之外有島嶼若干殆如盆池月  
波之景境致之佳與丹後天橋立安藝嚴島爲三  
處奇觀也僧師鍊曰松島其地東溟之濱小嶼千  
百數曲洲環浦奇峯異石天下之絕境也是亦想  
可謂能縮勝狀於數字而無遺漏者也天下絕境  
之稱未爲過之

松島記

源君美

天下名山水世之所稱可勝數哉而號爲神奇靈  
秀者多在東西焉萬物之生發育於東擊成乎西

蓋天地英靈之氣所鐘不在乎此必在乎彼理或然也司馬遷曰禹本紀言河出崑崙々々其高二千五百餘里日月所相避隱爲光明也其上有醴泉瑤池今自張騫使大夏之後也窮河源惡睹本紀所謂崑崙者乎故言九州山川尙書近之至禹本紀山海經所有怪物余不敢言之也美於蓬萊言之亦然其物禽獸皆白黃金銀爲宮闕皆是燕齊怪迂之士夸誕虛妄之言今夫我東方國於萬國之東去此已東寸土尺壤似糝米粟粒之不在則知古之所謂日下陽谷蟠木扶桑太平之人君

子之國及神山群仙之居皆是我式國之中或今古異稱或方言殊譯不可得而考乃者文廟之世美奉明旨屢遇西洋喇蘭地人以訪四方風俗喇蘭地人者以善游布地名天下焉且觀其國所鑿萬國地形員毳半毳等圖略聞其說我在東方則大地上下之極際而我東方之東一邊地轉出於彼所謂地平綿下蓋東陸瀕海之處古人以爲天地奧藏是已美竊以謂是則陰陽晝夜之所分而衣被日月之精華最爲萬國之先易曰元者善之長也天地之至美必其在乎此及觀夫壘竈松島

等圖誌則知其果然但其地名古未之間  
天朝地誌散亡久無由考詳己今據圖誌其地則  
在大海之濱曲岸回瀆連抱四合隱若大環獨缺  
其東十二鹽竈之浦在其南隩而有左右二社蓋  
是太古神聖始作魚鹽之利以贍民用後世尸而  
祝之社而稷之舊稱之曰志波日子神社方言志  
波即鹽也日子乃古之尊稱

皇家祀典亦與焉郡名宮城蓋神聖之墟也去此  
水行一十二里而到松島々々在其西灣海中洲  
嶼大小凡百赤崖白沙碁布星列登高望之則鬱

々蒼々皆是青松之所蟠根也若夫雲烟開歛濤  
瀾起伏鳧雁飛鳴於其前魚龍出沒於其下而四  
時朝暮雨暘晦明變化倏忽不可盡狀古之所謂  
蓬瀛之洲其奇如此耳而前人之述亦備余復何  
言雖然有一焉東陸之州古稱其俗勇悍好相殺  
略美嘗聞東方之人仁也其俗尙如此何其反也  
古者是州爲毛人所據也久漸染之弊或其然也  
仁者必有勇豈是其天性歟昔岐豐之地周人用  
之興起二南之化秦人用之有併吞八洲之氣顧  
其導之之術如何耳况州之人士出乎其性者哉



至此島國首國氏崇之言御島

和歌本配下與歌第四交 上宮太子

松島哉御島者不見止日標方之月之都之外于

尋者 本云是五句成篇意製之體也

或人れ子三人にろうみり抄さ抄たりとる

又れ日ひひつかはしとる

詞花賀 清原元輔

松島の磯にむれるる蘆田鶴のをれかさまさ  
まみえと千代如あ

重之家集おはむねとるかみまの國にて

子とものうふりとるはとめ三人

重之の歌とれ

八月十五夜和歌所に歌合に海邊秋月と

いふことを

新古今秋上 鴨長明

松島や鹽をむ海人れ秋れ袖月は物れもみな

らむのあかは

建保六年内裡歌合戀歌

新勅撰戀三 前内大臣

まは島や我身のとえあやく鹽のけふりのす

あどとふ人もりか

海邊擣衣といふことを

續後撰秋下

權律師公猷

松島や海士乃笞屋此も小霧に汐かせさむ衣  
衣う川なり

續古今秋下

權大納言實雄

まつあまやあまのも忘る木をれあらこり  
ぬ思ひにたつけふりかな

千五百番歌合に

同

土御門内大臣

浦かせや夜寒成らむ松島や海士乃笞屋に衣  
うつかり

同戀四

人九

逢事といつあつとれみ松島のかはらそ人と  
戀わさるりか

以此歌考則詠松島者見于人丸是亦可以  
考証

題あらぬ

よ見人しらぬ

あちれくにありといふある松島乃ま河に久  
敷とはぬ君かな



蓮生法師松島へま字て、法門あと談して  
歸りけるにけりとしける

新後撰釋教

見佛上人

長夜の闇路に迷ふ身ありとも眠覺あそ君  
を尋ねん

返志

蓮生法師

同

やみ路は迷もはてし有明は月松島の人の  
あるへに

人比許へけりとしける

玉葉集一

清少納言

便あるかせもやふをと松志まによせて久志  
き海士乃と志舟

後京極攝政内大臣に侍ける時家に十首歌  
よみ侍けるは秋

續千載秋下

前中納言定家

松島の海士の衣手秋をけりいつかそほさむ  
露も志をきむ

新續古今雜上

前大僧正實助

つれあをよひまは何をよまつ島やをしまぬ

老のなとどかさねて

名所百首歌合

順徳院御製

逢にりふる契をの尻そまつ島やおまれぬ  
身のなとひかれども

定家朝臣

更る夜をこゝろひとつふ字々み川、人松志  
まの海士比もし不火

家隆朝臣

海士乃袖所ぬそむか終て松島も下紅葉する  
秋を悲志き

弘安元年百首みちのく

夫木集

後九條内大臣

千里まゝ枝さゑりはず松島はいつれ乃木よ  
りかりはこめらん

文集百首望春々未到可在海門東

同春

慈 鎮

見ちのをや春ま川島の字らりすと志はし名  
社の關路にそ見る  
雲葉

同

上東門院兵衛

松島ふかき純る浪れしうらと見えは藤  
のさうり成なり

詠藤花于此島與後篇松島橋歌可併見

家撰歌合

同言語部

後京極

松島や浦りせさむき磯寝哉海士の刈藻とむ  
志きもふあて

浦島子

同島部

爲相卿

常世よは又もへらぬ松島やさてと川此の

の浪にかきへむ

秋風 濱鹿千鳥

歌枕

法橋春誓

松島や心あるあまの濱ひとと浪の軒端に千  
せりなく也

慈 鎮

松島やかひれする海士を尋てもくあふるそ  
ては色ぢりはれる

建保百首

俊成卿女

逢まくとぢら行月とまつ島の浪より外にと

そぬ袖うあ

同

範宗

しと浪れしゑすや君と松しまにあを立ゝへ  
りりゑる心を

源氏須磨に京へ人出たて給二條院へた  
てまはり給ふと入道此宮をはりきもやり  
給てはゑさき給へり宮には

源氏

松島此海士の筈やゆいゆからん須磨のうら  
人し不たるところ

人乃心とむ氣もあかりちなりと心のひ  
をりたゆまかせすり時はめやすくもてり  
へ志けりそゆゑあそれに戀あうゆいか  
まおほ志出さかん御うへりもすことま  
やゝにてこの頃はいと

藤壺

忘不たることをやをにて松島二年ふ海  
士も歎をせつむ

同夕霧にかよひさるそともぬき給ふて  
心ことあるととりかさねてゑれあめ給ひ

先てさう月をろいほさう志て出給ふを雲  
井お見出してあはひ四さくなまよ乃出く  
純はぬきをめ給へるむとへのそてと引よ  
夢て

雲井

なるく身をうらみむよりは松島れあまのお  
ろゆれたちやかへま志  
なをう月志ひとにてはゆきを月ま志四り  
けりとひとりこそお乃給ふを立とまりて  
さよこさううれ御こさうかな

夕霧

松島乃あまにぬき衣馴ゆとてゆれかへつて  
ふ名をよめやは

松島八景

松島秋月

松島十分秋留連皎月洲金波暉桂楫玉水曜蘭  
舟啼斷猿崖白眠驚鷺石愁歸來人不寢猶上使  
南樓

雄島夕照

雄島一洲秋沈々返照幽斜餘江水寂纔射海雲

愁柳縣漁罾曝松村暮磬浮黃昏人不見沙岸對  
問鷗

梅浦早春

梅浦一枝春早機深雪津傍磯疎影瘦含暖暗香  
新月照羅浮夢花餘隴驛真江橋多落盡漁笛苦

騷人

霞浦歸雁

江南歸雁春燦々彩霞新風浦殘聲遠煙汀數旗  
屯客懷鄉里信燕背寒雲身茫茫平沙岸向北別  
香蘋

瑞巖曉鐘

疎鐘殘月寺霜氣滿江天淵澆南暝外紆餘東海  
邊鶴林添露警僧窟與禪圓菱市三年日衆漁  
釣鮮

竹浦夜雨

一夜千竿雨砂汀蕭颯寒漁燈露短炤釣笛促淒  
酸松咽湘琴怨蘭鳴楚佩難曉光烟竹浦餘滴灑  
琅玕

鹽竈暮烟

秋江殘雨裡鹽竈暮烟微慘淡籠通岸瀟漫罩石

磯<sub>子</sub>曳<sub>レ</sub>寒松島翳掠<sub>レ</sub>水葦洲啼浮翠蒼溟外宿砂功  
未<sub>レ</sub>非

江縣殘花

獨愁<sub>二</sub>三月暮跋涉惑<sub>二</sub>西東春盡吳門雨花飛楚岸  
風日添<sub>二</sub>汀草綠<sub>時</sub>時減落桃紅<sub>子</sub>江縣烟霞裏啼鶯處  
々空

鹽竈八景

鹽竈暮烟

千賀漁父

黃昏千賀浦鹽竈簇<sub>二</sub>幽烟柳塢涵<sub>二</sub>風翠<sub>子</sub>花崖擁<sub>二</sub>露  
鮮<sub>子</sub>曳寒分<sub>二</sub>斷雨<sub>子</sub>和霧罩行船<sub>子</sub>嘗預<sub>二</sub>融公賞<sub>二</sub>景華<sub>子</sub>遷

洛川

離島斷雨

離島陰雲暖凄然斷雨寒沙鷗飛夢溼洲鷺潤翎  
乾潮逆<sub>二</sub>松巖落波侵<sub>二</sub>蘆岸寬<sub>子</sub>釣翁始脫<sub>レ</sub>笠仲霽坐<sub>二</sub>  
磯<sub>二</sub>磯<sub>二</sub>

社頭賞春

山社十分春參差花柳新絲堆<sub>二</sub>粧<sub>二</sub>燕界<sub>子</sub>紅鬧飾<sub>二</sub>鶯  
隣<sub>二</sub>泥露<sub>子</sub>芳姿淨迎風艷恨聲一枝強不折即可奠<sub>二</sub>  
明神<sub>二</sub>

法蓮臨潮

飛樓聳碧寥萬里睇春湖玉穴渦生水銀山湧接  
霄鯤威洲荻振雷怒岸松搖空逞雄豪望依欄眼  
界遙

江鄉春雪

二月雪江濱整斜冷豔新寒蘆墮葉亂斷荻玉花  
句草禁烟汀碧梅妬野水春驛樓吟斷處漁笛過  
雲津

前津泊舟

秋夕又春晨征船泊此津楫歌分土俗鄉酒忘悲  
辛雨卜蓬飄月風禱江社神雁雲歸路遠瞻望五

湖人

松浦秋月

淒涼松浦秋明月滿三洲鶴水歸仙夢猿雲豁客  
愁寒光千里海爽氣五更舟枕籍篷中睡遐思赤  
壁遊

壺碑懷古

將軍藤惠美嗜昔示蚩民字暗添新墨行銷苦積  
塵賴朝職雅古宗久遠遊親緬想天平歲讀碑墮  
淚顏

松島浦



南至栖霞潭北石磯洲外宮戸寒澤桂花納囊島  
嶼恰如載之白銀盤上其島陰乃大洋也潭謂之  
松島浦其間江上許多之洲渚波間無數之螺髻  
綺之立基之布過者每凝眸矚者還驚神  
藻盪草浦部松島浦奥州磯の田鶴氷鳥橘衣紅葉海  
宗久紀行寺の前南は志ほるまのうらみほる  
きて千島あといへとなをたのりりあへす  
或は沖れ遠島をて海をへたてと遙かなりそ  
の間に島おろを見へあり

夫木集

顯昭

有明の月に夜舟とあはゆけは千鳥鳴あり松  
島のうら

能寫得江上夜泊之狀而如對畫中

松島橋

未詳何地在五大堂御島外無架橋處

五大堂有二短橋兩岸數仞其橫梁一斷一續空  
其間橋下水碧深千尺臨者眩目度者傷神人或  
比之銷魂橋岩畔多長松蓋往昔有藤蔓而花陰  
臥橋上歟御島亦有長橋是亦前後有松林但考  
之紀行則宗久來過之時繩扁舟而通于雄島地

焉蔭幽徑之像乃雄島尤近矣

良玉

民部卿忠教

ふみこりてこよりゆりすむらさき比藤咲  
のゆる松島の橋

松島之於藤花此咏之外見前篇上東門院  
兵衛歌可併考且夫和歌者流詠藤花者必  
繫之以青松焉矧於萬松鬱々地而豈無繫  
藤蔓者乎故末松山松浦島之作多帶藤花  
而詠之藤花之藤長橋者豈不雅興耶

松島寺

乃今瑞巖寺是也相傳仁明帝承和五年戊午始  
開台宗而建此寺或曰其始祖乃法身也法身其  
氏真壁其名平四郎者爲浮屠而入于宋受法于  
經山無準而歸朝所闢地也北條相模守時賴修  
造之號松島山圓福寺先是稱松島寺爾後稍荒廢慶長  
十年乙巳我黃門君造替寺院新起土木令中村  
周防丹野甚右衛門大塚善内鈴木左馬介武藤  
左傳次等監造焉上梁乃梅村彦左衛門家次紀  
州良匠刑部左衛門國次者勸之是歲六月癸未  
落成輪奐壯麗極其美焉請僧海晏以住改曰瑞

巖圓福禪寺僧房十餘宇排之左右左傍竟月護國寶珠圓同大光聯芳法雲其右萬松江月青松傳曲紹隆得住合十區其地也青山環其後蒼瀛湛其前寺畔有岩洞曰法身窟始祖坐禪于此左方曰陽德院右方有天麟圓通二院寺門左右皆市店也比屋俱設旅舍構高樓望微茫于欄外挹幽趣于坐上水灣舫舟地曰之繫舟汀右有觀瀾亭太守遊觀之地也左有五大尊堂其東瀛盡浮群島遊眺壯觀之美豈夫靈隱而已哉此亦樓觀滄海日門聽浙江潮未待駱賓王之句焉

### 釋法身

遠上經山分風月歸開圓福大道場法身透得無一物元是眞壁平四郎

元享釋書曰釋法心過壯歲出家不知文墨問禪子之稱宋地禪行駕商舶入臨安徑登經山見佛鑑禪師鑑於圓相中書一丁字示之心止席下單提研究性堅硬耐禪坐骨臀腫爛而不撓者九年初持丁相於萬物中現丁字心不屑漸經歲餘席始得平穩歸朝居奧州松島臨終先七日謂徒曰某日當取滅然心無恙侍僧不信到斯齊罷坐禪

床待僧乞遺偈心元不克書即喝曰來時明々去時明々是々何物止而不言後句待僧曰猶欠一句望足之心應聲喝一喝泊然而化

宗久紀行云云ほりまより浦川たひに松島にたつね行はるに心ある海士に住家と見へたり又此所より圓福寺とく寺あり覺滿禪師開山の地あり僧徒百人寺住すとらや

聞之寺僧法身法心本一人而心當作身蓋師鎌傳聞之謬也又宗久以覺滿而爲開山者非也考寺院歷嗣則覺滿自法身五世之住持向

住法雲菴後爲瑞岩寺住僧是亦鄉人妄傳說俾宗久誤者也

按浮屠氏每々主張達摩所謂不立文字一字不說教外別傳之語而甚誇說是乃爲離文盲之徒不學之者無弊于傳法悟道之證焉故以不知文墨而贊法身夫文字者貫道之器也唐李漢所謂不深此而道至者不也者信乎哉彼徒記六祖惠能傳法之事而舉無一物之偈今熟視之豈不知文字者之作乎格律備而字熟句老何不知字者如此夫吐秀逸乎况述心法

傳授之正味乎夫釋迦一生之間血口燥舌說  
八萬諸經抑是何爲哉爲文字本無用之物而  
縱令文盲無害于傳法則其所說經論者果是  
妄言耳實是捉風弄影之事而豈足信之哉若  
有不因文字猶悟入醒覺之術則釋迦一生之  
所說達摩終身之所述者及古來所傳祖錄法  
語之屬徒反古堆覆醬紙而已縱令淺近之技  
術非文盲之輩能所會得焉况傳法悟道之重  
乎且法身坐禪之間骨脊腫爛而不撓者九年  
可謂辛勤之人然今以人倫日用之大義議之

則抑是何益耶是中庸所謂不可強而強者也  
浮屠之行每々皆會豈不誤哉

釋月潭

聞說松島勝山水甲東州仙臺城郭近瑞氣映滄  
洲民物俱康阜藩侯德政優宅與古梵刹萬礎聳  
瓊樓見佛遺蹤在清心道蹟留殘碑宋僧字薛蝕  
歲月悠膺翁去未久慈化播遐陬繩々芳裔夥董  
席振嘉猷戰々犀顛萃安禪不憚脩巨鏞橫旦夕  
梵放薄雲頭寺門臨江濶烟霞豁兩眸小嶼千百  
點星布翠螺浮松梢飛白鶴洞口臥蒼虬擡蹙連

江渚土腴草木稠巖陰曠養舍磯畔繫漁舟天然  
一幅畫摩結筆難收蓬萊與方丈奚須別處求聞  
勝欲呼策迢々驛路脩既乏淩雲錫又無縮地謀  
山臆清夜夢且此作神遊

登圓福寺方丈

釋恒寂

圓福古叢正始臻前臨海嶼後嶺崎雄基本自注  
心創結構重因道廣攝榻上草花離巧彫壁間圖  
畫世爲珍可容八萬四千座環堵空寬床絕塵

幽篁浦

在松島寺以南其北畔水汀曰破浪灣荒苦汀是

古人之所謂雄島之苦屋荒波浪者乃斯地也皆  
相連而近乎雄島矣有寺曰法性院幽闐而來客  
稀也過寺門者經象鼻岩青春磯之苔徑而自是  
入于御島

贈竹浦老師

田宗魯

竹院着絃歌吟中佳趣多高僧忘物我招客臥烟  
霞

和枕流老師韻

同

幸免簪纓傳此身從心所欲可逢春暫離城市笙  
簧遠數間江山魚鳥親波上月浮如躍壁花間風

過豈揚塵更無閑夢到魏闕莫比晉朝道隱人

同和六言韻

同

豈無羅襪凌波堪餞金衣弄歌心醉烟嵐十日歸  
程驚落花多

御島名所集作雄歌枕作小今從見佛傳

在竹浦東南經水汀踏白沙而行七八町右旁嶺  
上松千樹左邊屏風島落陰涵翠過長橋而入幽  
徑苔蘚露深岩崖路滑上有坐禪堂傍有一亭號  
把不住軒道膺往昔捫遲之處此地乃見拂上人  
之故蹤也塔婆浮圖轟々而植古墳荒塚累々而

列其北岸有宮千代遺跡自是過細徑而有骨堂  
向西南墻底徹泉收死者之遺骨散髮等之地也  
其堂後有賴賢古碑其地也老松五六株海風吹  
浙瀝斷岸數千仞江波來奔騰其北渚也幽沈寂  
寞沙汀來客稀松杉寒鴉集殆非凡俗塵囂之地  
焉登島上者必發悽愴悲哀之情矣

元享釋書曰釋見佛居奧州松島其地東濱之濱  
小嶼千百數曲洲環浦奇峯異石天下之絕境也  
其尤者曰千松島佛結茆而居精勵苦鍊一十二  
年其間誦法華滿六萬部其後不計數專一持誦

世曰、淨六根、役使鬼物、屢顯靈應。天仁帝鳥羽帝年號

聞道譽、賜佛像寶器、而旌異之。依茲土人、改千松

曰御島、蓋境得人、而顯。又人因境、而傳也。年八十

二終

宗久紀行、南へむるへる山陰の磯、死は石

を高く、ぬゝ死て不そき路あり、海の死は、石

さへゆ死て見きは、すすさき、松生、如た、死々

木末と浪、おむた、捲り行り、舟とさあり、さ

つ、此緑をゆを、こゝ地、捲する、それより、すあ

とへたて、小島あり、是あむ御島、あるへ、志小

舟に綱を引けて、くり返る、川、かよふ所あり

此島、お寺あり、來迎の三尊、井ひに地、藏不さつ

とを、お奉れり、又を島より、南一丈、そのり、さ

いて、松生ならむて、苔ふか、を心す、こ死所、あ

り、此國、此人は、あを成、おなる、遺骨を、藏る、地

なり、是乃骨堂、今、そ乃、外法心、の人の、きり、さる、もと

をり、なと、もね、ほく、見ゆい、と、あ、己れに、心す

あて、ね、不へ、志、おは、二三日、と、さ、り、侍り、き

た、れ、とな、き、別、れ、乃、數を、ま、川、志、ま、や、せ、し、ま

ら、い、その、涙に、を、みる



按師鍊依一山說而述地名來由曰千松島  
鳥羽帝感見佛苦鍊有睿賜來改号御島今  
以重之歌始並稱松島御島者考則重之乃  
村上帝朝人先見佛已百五十餘年豈始于  
見佛哉且據和歌本記則其名始于日本武  
尊而稱之者久矣然先是有地名而或書雄  
島或書小島者至見佛之時榮天子之賜而  
以御字易之耶想夫較松島之多景則用小  
字比群島之磊落則用雄島字乎識者辨之  
藻鹽草雄島わ字しう月  
れ月  
あまのつり舟  
れ衣  
まか

ちまくら  
とまくら

岩

秋の夜の月や

ちとり

松

薩天錫

風光招我海山阿拍手吟魂奈句何御島烟波松  
島月到茲捲舌富樓那

上御島

田宋魯

山路高低花縱橫鐘聲時雜宿禽聲峯頭徐上春  
霄月影落波心一段清

別松渚自一字至七字

春々鳥集花新山谿暖歌吹頻酒伴時至詩徒日  
親曾無垂釣客或有圍碁人景老何須惱意境清

儘足<sub>レ</sub>怡<sub>レ</sub>神<sub>ヲ</sub>屈<sub>レ</sub>指<sub>ヲ</sub>方驚三月盡閑遊不是惹紅蓮<sub>ヲ</sub>

又

素愛山中宿龍泉茲暫留藏<sub>レ</sub>花孤島嘯<sub>レ</sub>映<sub>レ</sub>水數峯  
流磨<sub>レ</sub>墨<sub>ヲ</sub>時題壁捲<sub>レ</sub>簾<sub>ヲ</sub>日上<sub>レ</sub>釣忽思妻待<sub>レ</sub>我清興未<sub>ニ</sub>  
酣休<sub>一</sub>

帶刀に侍り<sub>ニ</sub>時春宮<sub>ニ</sub>歌<sub>ハ</sub>忘<sub>レ</sub>け<sub>レ</sub>は戀

後拾遺戀四重之集

源重之

松島<sub>ヲ</sub>を忘<sub>レ</sub>まり磯<sub>ハ</sub>いさりせ<sub>ニ</sub>蟹<sub>ハ</sub>そてあ  
そ如くはぬれ<sub>レ</sub>忘<sub>レ</sub>か

歌合<sub>ニ</sub>侍<sub>ル</sub>と<sub>レ</sub>死戀乃歌とくよ<sub>ハ</sub>侍<sub>ケ</sub>る

千載戀四

殷富門院太輔

見せは<sub>レ</sub>やあを忘<sub>レ</sub>まのあまの袖た<sub>レ</sub>ぬれ<sub>レ</sub>に  
そぬれ<sub>レ</sub>忘<sub>レ</sub>色は<sub>レ</sub>かはら<sub>レ</sub>ん

八月十五夜和歌所歌會<sub>ニ</sub>海邊秋月と<sub>レ</sub>い<sub>ハ</sub>

おとを

新古今秋上

宮内卿

こゝろあるを忘<sub>レ</sub>まの簪の袂<sub>ハ</sub>あ月<sub>ヲ</sub>と<sub>レ</sub>れと  
はぬれ<sub>レ</sub>物<sub>ハ</sub>ぬ<sub>レ</sub>る

和歌所歌合海邊月を

同

家隆朝臣

秋の夜は月やとままのあま乃原明かたちか  
き沖のゆり舟

土御門内大臣家おゝ海邊歲暮といへるあ  
らろをよめる

同冬

藤原有家

行年ををしまの海士のぬは衣かさねて袖お  
浪やうゝとん

守覺法親王家よ五十首歌よませ侍けよふ  
旅は歌

同族

皇太后宮太夫俊成

立ちへり又も来て見む松島やをよまは昔や  
浪にゆらすあ

按小島之詠以此歌而為絶唱焉故和歌者  
流為制詞以賞之來

百首歌奉りしに

同

式子内親王

松かねのよしまの磯の小夜枕いたをなぬは  
せあまの袖やは

新勅撰卷上

前參議親隆

松しまやをしまりいその夕霞とな引こたる

あま乃たくるは

續後撰戀二

録倉右大臣

浮名のみをたまの種のはれ衣ぬるときあいむ  
そ朽そはつとも

續後撰戀五

西園寺入道前太政大臣

憂名れをたまの海士に身せりへていりふ  
うらえむ人のこゝろを

海路時雨を

同

皇太后宮大夫俊成

袖ぬる小島ういせりとまりか松風寒み

あを統ふるあり

千五百番歌合に

續古今雜中

大藏卿有家

かせふけは海士の筈屋れあ統まくもとたま  
如いそによする浪哉

海月と云題とよませ給たまる

新後撰秋下

今上御製

もあほ焼烟も絶て松島やをたまの浪おはる  
月うけ

千五百番歌合に

同冬

皇太后宮大夫俊成

松島やを忘まり磯による浪の月のこもり  
千鳥なく也

按凡題名地者身在帝都而足未履其地以  
傳聞而施之想像億度故其與地景齟齬背  
馳者往々皆愈然今俊成卿詠此地者凡三  
首皆暗合其土之風致可謂擇而精語而詳  
者實歌林之冠冕者也

遊義門院

つれなくも猶逢事を松忘まりやと忘まりの磯と

そくはぬれぬ

藤原親盛家歌合にれなしこゝろを

玉葉冬

勝命法師

夜舟こゝ瀬戸の盪合ぬ月澄て雄鳥かゝるに  
千鳥忘はなく

續千載春上

後京極

のとりかる春の日影よま川島やを忘まり海  
土も袖やほすゑん

山階入道左大臣家十首歌よ島月

同秋下

津守國助

浪のへる小島の苦や秋をへて荒るゝもあふ  
は月やそむらん

同

前参議忠定

松島や雄島の蟹のすて衣思ひす川流をぬる  
、袖かな

同戀二

正三位知家

ま川島やをしまのあまよ尋みんぬれては袖  
の色やりはると

雲葉雜歌

從二位家隆

あはわたる雄島乃松の木すゑより雲にはな

ゝあまは釣舟

此歌能寫出曉天島外之狀先是屢投宿于  
松島水汀曉來側臥于樓上而開曙窓于江  
頭則每々必得此佳趣

新千載戀一

前中納言有光

憂名のみを忘まは海士乃夕煙とてしをさき  
と浦り抄そふく

新拾遺戀三

醍醐入道前太政大臣

逢見ても名と抄を忘ま乃海士人はけさ乃れ  
きに抄袖ぬらあける

新續古今族

有家

浪のゝるとたまか磯に浪枕こゝろをてみけ  
八重に盪かせ

前大僧正實助

つきかをいまは何とくま川島やをえまぬ  
老れ浪せりさねて

建久四年六百番歌合寄海人戀

拾遺愚草

定家

そてぢいまは小島の蟹もいさりせん海さぬ  
さくるよ思ひくる哉

堀河百首

俊頼

あら志ふくをしまの磯の瀆千鳥岩う川浪お  
立さはをあり

夫木集下同

從三位保季卿

あそれ秋越路もおぢをま川島や春はとたま  
のりへるかりの糸

建保八年八月八幡宮歌合海邊鴈

俊成卿女

ま川島やをたまかいぢになを鴈のなまたも  
ぬらす海土に袖りか

承元三年長尾歌合

同

法印猷圓

これおゝに秋風ふとは松島やを志まの浪に  
るへるありりね

題不知

同

源季廣

興津かせやゝ寒のゑ志松島や小島の浦は千  
鳥啼也

磯千鳥

同

前中納言定家卿

誰と又夜ふゆき風をま川島やを志まれ千鳥  
おゑさはま也

長承三年九月顯輔卿家乃歌合紅葉

同

藤原忠兼

ちりぬへは小島の磯の紅葉々ふあらくもよ  
ずる沖津波りか

家集島上櫻

源仲正

し布りせにを志まのさくら花のなて浪のみ  
たてもなくてちりぬる

平野社歌合月前千鳥

如覺法師



ささのはる月の出壺にさははれて小島の千  
鳥浦川あふかり

承元三年長尾社歌合 参議雅經卿

名残をや雄島乃浪にさ川鴈のをのうははさ  
もさはれくそめを

承元三年海邊歸鴈 をしまのうら  
陸奥又常陸

權少僧都自嚴

行鴈の名残としまのうらみても袖さはたる  
る春のあまひと

家集松風曉冷といふことといせ又陸奥

神祇伯顯仲

曉やとしまか磯の松のせに衣のさねよゆ  
のうらひと

玉吟 家隆

かへる鴈小島の海士をうらみてもその如翹  
ももし得たるらむ

建保百首 定衡

松島や雄島のいその海士の袖いそとせ浪に  
さはきはぬらん

忠定

ま川志まやとしまの阿まのそて衣思むす川  
れをぬる、袖りあ

康光

暮れは又いかに志のはん松志まや雄島乃海  
士の夜れおもひを

家長

海人乃袖いりにほしあへぬ松島や小島り磯  
に衣う川らむ

後鳥羽院御製

あま入乃抱くともわかきと回ひあん小島り

磯あさみたれのころ

夏もまゑと志まのい抱れかち枕夏ねれ浪に

秋りせ抱と川

新葉

土御門院御製

ま川志まやを志ま乃浪よこととはむ立かへ  
る趣き時もありやと

頼賢碑

高一丈曠三尺六寸五分彫竜以  
下五尺八寸五分石厚七寸

頼賢乃御島住僧其碑在御島西南是乃其門人  
匡心孤運者請寧一山而記老師行實之碑也碑  
首有奥州妙覺庵頼賢菴主碑銘并序十三字用

楷法而書二行其銘乃草書一山者以書名于世  
今碧蘚鎖石面文字半消滅尤可惜

巨福山建長禪寺住山唐僧一山一寧撰

德治丙午冬予再居福山丁未春有僧匡心孤運  
來禮謁云來自奧州手其師行實一通炷香禮足  
謂予曰吾鄉奧州有松島其側有御島有菴曰妙  
覺乃曩歲見佛上人來結茆而居見佛清苦精進  
身清嚴口緘默日誦法華經先十二年中已滿六  
萬部後至八十二入滅厥後所誦又不可以數計  
也六根既淨能役使神物靈異頗多道乃遍布聲

聞朝野適鳥羽院當宇賜本尊器物以旌異之其  
島本名千松島以下見佛承御賜之故時人乃易今  
名凡松島左右列島僅百數獨此名最揚蓋由見  
佛之故也吾之師名賴賢號觀鏡房生於本州源  
氏幼而鬻愿父母俾出家乃依長崎成福寺爲童  
子十五薙髮而學天台及真言教于講席久之忽  
自悟謂文字之學非出世之法主年四十二今圓  
覺無隱範和尚住松島圓福寺往依之居弟子列  
復遊方參聖一于東福大覺于建長佛源于壽福  
孜孜請和法無異味仍因圓福將終老焉無隱遷

相州淨妙空巖慧和尚繼席適此菴乏主者空巖乃舉師以補之既居歷年光大振興即法社之未完者咸修備之口誦法華心住禪寂二十二年影不出山鬱爲叢社四衆攸歸人謂見佛上人之再世也矧其天性慈和略無畛畦待物如一清澹安恬精勤不怠誠未法化物之儀軌也世壽今八十三僧臘六十七居處如平居時度弟子三十餘人匡心孤運等以師之德之功不著于後我之責也相與議立窣堵波以紀之敢求數語以信于後子聆其語又覽其詞因思古之立道場振法門者由

是道賢師其由是道乎贊寧師作僧傳有興福一科賢師其在斯科乎既有補於法門故爲銘之銘曰

人惟德馨 地由人興 御島之菴 見佛始營

賢師後居 乃臻厥成 清明勝靜 開迷醒醒

慈善根力 克享脩齡

弟子樹茲窣堵波紀其德行予爲銘是歲三月十五日書 小師三十餘人匡心孤運同立石

德治後二條帝年號無隱松島第四世住僧曰知覺空巖第五世住僧曰覺滿是乃宗久之所

紀之僧也

師鍊見佛傳本一山語一山碑依匡心孤運語而記之是時猶言千松島矣自見佛得優賜而始稱御島者亦兩門人所語而一山親聞之實記也雖然重之此輿州刺史而見佛之先人是亦直視實語之証也且稱千松島者一山所言之外無所見也雖鄉里士人無嘗以傳之呼其名者矣尤足以可疑之

題賴賢碑銘

高玄岱

苔鎖雲封四百年屹然如岸立無遷賢師達觀天

開鏡妙覺空華口吐蓮一字一鐫功用普隨形隨摹筆端圓誰教巧奪神工手直把老仙面目傳落雁峯

御島以西高峯秀于佗山兩峯相並而嶙峋嵒嶭山形嶺勢望之江間則似飛鴻展其首而張兩翼矣仍曰之落雁峯其山勢之屈蟠于水汀處曰之鴻首磯土人以其訓音之相近而誤曰之腕崎以爲其狀如人之曲肱而伸之其前焉誤其名于所取之義者也

朱鳥嶺

相並落雁峯相傳往古有神仙逍遙于山中有朱鳥常相從焉故曰之朱鳥山是亦土人誤其稱呼曰姊取山

眺浪坂

入于松島長坂也其道路之間江上之佳境曲洲環浦奇峯怪岸隨步而盡入于眺望就中其壯觀者複羅之蟠根樹林森々落重陰幽篁倚々蘸翠色長洲之縹緲白沙曳素練遠汀界碧浪其佻波間之布帆木末之漁艇奇絕種々如畫風雅之徒稱眺浪坂是亦誤呼長老坂

八幡神社

類聚國史畿外奉勅宮社部曰舒明天皇三年七月陸奥宮城郡松島八幡奉勅使早良連惟保時疫

退漢松

在眺浪坂右旁土人相傳往年釋西行爲鳥羽帝北面時私通宮女屢謀密契宮女恐其人言戒之以阿漕語西行不解退問人未遇識者自是雲雨亦遠煩悶而入浮屠周流足跡幾遍于諸州蓋欲下得識者而解彼語意東行臻茲有一翁牧牛於松

下<sub>ニ</sub>牛齧<sub>レ</sub>草<sub>ヲ</sub>而不<sub>レ</sub>飽<sub>カ</sub>焉<sub>ヲ</sub>翁叱<sub>レ</sub>牛<sub>ヲ</sub>曰我牛奚<sub>ヲ</sub>阿漕<sub>也</sub>西  
行勃然而驚蕩然而喜問<sub>ニ</sub>之<sub>ヲ</sub>翁<sub>々々</sub>曰子爲<sub>レ</sub>誰<sub>ト</sub>曰西  
行者也翁曰西行乃歌林之秀胡<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>解<sub>レ</sub>之<sub>ヲ</sub>仍引<sub>ニ</sub>古  
調<sub>ヲ</sub>而答<sub>レ</sub>之<sub>曰</sub>

伊勢海阿漕浦耳引網毛數度波發顯乎爲  
翁罵<sub>ニ</sub>以<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>解<sub>ニ</sub>此語<sub>之</sub>之拙<sub>上</sub>西行無<sub>ニ</sub>以對<sub>ニ</sub>自<sub>ニ</sub>是乃耻退<sub>レ</sub>  
稱<sub>ニ</sub>其松<sub>ヲ</sub>而呼<sub>ニ</sub>西行退<sub>レ</sub>其翁<sub>ハ</sub>乃松島明神也

此事極淺近殊西行禁闈之侍臣歌林之翹楚  
何<sub>レ</sub>暗<sub>ニ</sub>此<sub>レ</sub>一句乎西行事迹載歌書舊記是亦一  
世之名稱也其中紀經過東奧而相見見佛于

松島之事爲荒煙波々乎多方者常人不爲焉  
况達人乎以翁爲松島神者羨阿古耶松故事  
而牽合爲之說者也今姑從鄉說而舉于此  
鷗沙灣

在落雁峯以南水濱鄉俗呼大澤有精舍曰海無  
量寺幽闕清閑可愛之地也一日秋夕自松島棹  
扁舟繫柳陰而上水汀行々分蒙密過幽溪細石  
磊落芦荻蕭瑟其境殆類曲逕通幽徑之情焉稍  
登回磴而入于深松投寺院而與僧話舊坐久而  
海月昇松梢江風度峯頭張籍詩所謂秋山無雲

復無風溪頭見月出深松者宛然自來夜闌更老  
取輕舟短棹于寒江時秋夜沈々萬頃空四顧寥  
々歸路遠月色嬋娟落江波清影玲瓏沈海底幽  
趣今猶不忘仍記其情狀于此而証地理

五大塔

在瑞岩以東大同二年坂上田村麻呂造營之置  
五大尊黃門君慶長五年攻刈田白石城得夢徵  
仍九年十二月令監造阿部藏人紀州良匠鶴右  
衛門等修造之有兩短橋見松島橋下其東面則  
覆羅梅影潭解羅藏經般若若旭日仙冠翠柳彩繪

苦延白翁九子諸島涵陰其北則寶珠崎通舸磯  
龍首巖石磯洲曲隈映波其間沙場奕擡之地也  
群鷺浴鷓二島並翠灣其北乃高城驛也  
宗久紀行云松島の東あ富りてはかれたる島  
に橋とこととあてむとつゝの堂あり五大堂とい  
ふやうて五大尊と安置せり  
松島明神

在高城驛西樹林中鄉黨曰之紫明神未詳祭何  
神焉或曰松島明神以在桂華島為是然以方隅  
取之則豈阻遙海離平陸者為鎮護地主哉當以下



此神祠為松島地主也

宮戶島

去松島水濱十餘里其地曠濶南北既長上有善遊堂其下斷崖巨壁危岸空洞上連青松下蹈白沙石磴屈曲堂前絕景堂後聳高峯曰之配霞峯言春來絳霞帶峯頭仍稱之島中多水濱其一日霧芦灣其二曰沙土灣其三曰落月灣繫商船業魚鰕之地也堂下有巨島曰都島見八幡都島下其前島曰孤月島其餘猶多

寒風灣

在宮戶以南有寺曰寒澤寺是亦商舶集會之地也其前巨島曰鳳羽島海岸出牡蠣極巨大甘美尤名產也其南方巨島曰納囊島大島也蝮屋富家多其東北有一島曰鷹巢島山形殊崔嵬層崖疊石如一盆石逆浪遶其斷岩潮聲鳴其曲磯皆絕勝也

桂華島

在納囊島南青嶺翠松連白沙素波急其東濱曰落星濱細石錯落疊波來去島上有神祠曰桂島明神或曰是乃松島明神也其南巨島曰神馬島

千尺丹崖相峙數間翠洞豁然奇絕可驚靈機可  
恐相傳太古以神明所駕之龍馬而放乎此地仍  
曰之神馬島

松浦島

去千賀地十餘里在青松濱佳境絕景不減松島  
往古島上有紫藤而得佳名今更無知之者此濱  
居民多以魚鰕為業以笮箸為役濱南斷岸千尺  
長灣數仞白浪濯石磯碧波染沙汀山頭有觀江  
臺登此見北隅南方西關東濱盡入于吟眸其地  
七疑峯和泉岳仙臺城大白山盤仞山篠谷關山

不忘大華名取巨龜伊具宇太相馬壽山等也水  
濱以東阻沙場遶漁家巉岩相峙長松相連岩下  
有一島上戴蒼巖是所謂松浦島也東北有小島  
號鵜鴫分前後而為兩島其西曰舞踊其東曰英  
雄島在其北海中者曰石巖明神搥釜末社也青  
松濱西曰菖蒲田南西曰水門濱有善遊堂市川  
遶其南汀傍有巨岩曰之臥石其南岩崖相連其  
岩下有空洞通行漁舟鄉人曰之通船穴  
藻摺草云松浦奧州音は火にさく霜一松か浦島搥風もま  
あまはのまはの木 あしたつ まはのひるま

西院の後御くまおろさせ給むくおこなは  
せ給ひたる時々の院乃中島の松の木と  
つりてかたけを侍りける

後撰集一 素性法師

音に死を松のうら島をふそ見るむへ心ある  
あまはすみとり

雪の歌とてよと侍ける

千載冬 願照法師

浪間より見ゆるあきせうはりぬる雪ふり  
にけり松のうらしま

題をらす

新勅撰雜四 祝部成茂

心ある海人のもえ不火あきすて、月にそあ  
らす松かうらしま

海邊雪

續後撰冬 藤原光俊

ふりはゆる雲ふ死かへを汐風にあらはれ  
ぬる松のうらしま  
をんかあつうそとける

玉葉戀三 大納言為家

浪乃よる志ほ乃ひるまも忘る此す心りゝる  
ま川のうらなま

文永二年白河殿にて人々題とさそりて七  
百首歌つゝふまほりたるつゝるては浦藤を  
よませ給ける

新撰古今春下

後嵯峨院御製

心ある蟹やうけむ春ことふふち咲りゝる  
まほり浦とま

鳥鶴と

玉葉雜上

源俊平

蘆田鶴乃あく音もとを冬きこゆ也浪を川り  
ある松り字らなま

新撰六帖

衣笠内大臣

いかよせむ忍やまの川とに川くみゆてい  
よも見搦んまつり浦島

家集藤花のさかりある松のもどあて

夫木集

源有仲

ふち浪のわらねる松か浦に來て見るめにあ  
るぬ蟹をありぬる

寶治二年百首みちのく

同

常盤井入道太政大臣  
すむ鶴も千よを千とせやゆさぬらん岩根に  
生ふる松のうら島

六帖

同

權僧正公朝

志はたると、蜚にそ乃名をまかへはやすは  
志免けむ松か字のしま

康元元年毎日一首中

同

民部卿為家卿

夏川の沖れよかみのさひなきにいと戀し

拾玉

慈鎮

け松のうらしま

海士れ子もちよへゆへいとれもふらん陰に  
のをるくま川かうら島  
心ありて物りさりせむ海士もるあ舟とぎと  
めむ松の浦志ま

玉吟

家隆

おもひあまり松かうら島尋見ん心ある海人  
やなくさむるとて

後鳥羽院

春うすみたてるやいづこ朝日影さしゆを舟  
をまつわうらたま

俊成卿

たれめを名人や有りけむ浪かせぬ衣うけな  
る松うらたま

貞和百首

下野

藻鹽やく心有るあまのゆふけふり月にはた  
てすまつか浦たま

草庵

頼阿法師

月とてもさへぬけふりはこころ有るあま

もいはる松か字らたま

源氏榊木ふとけわたる池の薄氷岸の柳の  
けさきはかりは時とすれぬあたま  
まあめぬき給てむへもこころ有るとま  
のむやのけうちすし給へるまたあ字なま  
めかし

源氏

あけめあるあまはすみかを見るのぬにまは  
まはたると松うらたま  
ときこけ給へそおをふらうもあぬはまな

ほととにゆゆりたよへ給へるたまふ所あ  
統はすこまはちりき心ち忘て

藤壺

有りまよのあこりさふあは浦島に立よる浪  
のめつらまはらあ

按讀岐有同名但其文字作麻都我浦仍載  
其証歌于後以分其異同

万葉

無名氏

まつ如浦にさはあうらさまひとあこと  
おもすあもろわもほはすも

拾玉

慈鎮

四方の海や霞いとに松わうら乃春の湊に  
春風そふ

後拾遺

定頼

松山に松のうらり移風よせはひるいてら乃  
へ戀忘き貝

返志

光成

たへぬより忘られも何へぬ衣手よまたはあ  
あけ松わうら島

行能

松ろうられとまりのいそときをも乃を名に  
もとそゑすかへる浪かあ

富有山

在小泉村有寺號大仰寺去松島東北數十里近  
境之高嶺也上有大悲閣大同年中田村麻呂建  
三觀音牧山篋峯此地是也斯地也特鍾東南之  
佳美于寺前尤壯觀也南極桂島北大塚宮戶浮  
于東瀛之微茫松島聳于西峯之木末其間脩洲  
之臥波間也引素統而長群島之橫海上也墨青  
螺而點篆烟之變慧者燒蕪塹也急雪之崩騰遊

江風也漁舟之分綠洋忽生ノ入之字勢布帆之  
接碧天更竭隱見之目力加之洲渚之動石鷗之  
集也林梢之點星鷺之宿也無邊之幽致凝于吟  
眸其富有佳美甲天下故名曰富有嶺

曝練洲在東溟其長十餘町廣半之直橫斷江  
上若引數百丈縞縑渺茫而皆白沙也其北村  
曰大塚以漁獵為產其西曰神丘洲中有小山  
曰之鬪灘洲東波瀾常惡有此小山而防之去  
鄉人呼曰鬪灘  
此已下所載于風土記而未詳其地



磐城莊

公穀六百七十二束三毛田假粟五百八十二字  
田貢<sub>ニ</sub>鶴鶴隼鷹牧馬鹿猪等<sub>一</sub>

源順和名集宮城郡村有赤瀨磐城大村多賀等  
數邑

伊豆佐賣神社

文德帝仁壽二年七月辛未陸奧國伊豆佐賣神授從五位下

圭田二十八束三毛田所祭溝昨比咩也天武天

皇二年奉圭田行神禮有神家巫戶等

淨光寺

寄田五十三束鑑真掛錫之地也

赤瀨鄉

公穀六百九十二束以下盡食

志津彥神社

圭田六十八束三毛田所祭饒速日命也天智天

皇三年始奉圭田行神禮

妙德院

寄田三十二束道源法師開基之地也

大村莊

公穀四百八十二束三字田假粟三百五十六九

Blank page with faint bleed-through text from the reverse side.

Blank page with faint bleed-through text from the reverse side.

